

以前ある研究会で、開発の受益者と被害者という対比でみて、ブラジル北西部の先住民ナンビクワラを、私は被害者の例として挙げたことがあった。その場合、私がこれまで通算して8年余り接してきた西アフリカの農民は受益者の方に私は含めたのである。西アフリカの農民は、国際機関の援助で道路が整備されたり、井戸が掘られたりすることを待望し、それが実現すれば利益を受け、開発を良いこととして受けいれている。これに対し、鉱物資源の開発のために聖地からしめだされたオーストラリア先住民や、道路建設と森林の伐採、農牧地の開拓、地下資源の採掘によって伝統的な生活の場を追われているブラジル先住民は、たとえ国家レベルではこの種の開発が求められ、益をもたらすはずであるにせよ、確実に被害を受けていると私は考えたのである。

それでも、1984年に私が訪れた頃のナンビクワラ社会は、FUNAI (インディオ保護局)の努力もあって、とりあえずは平穏に暮らしていた。だが彼らの生活圏が著しく狭められていたことは確かだったし、飛行機から見ると、森林の伐採は「恐ろしい」という感じがするほどに進行していた。当時乳幼児を含めても736人で、森の中で11の小グループに分散して暮らしていた。それ以前にも人口は減少を重ねており、戦後だけでも半分になっている。その後わずかに回復しているらしいが、民族集団としては消滅の一手手前だ。私が訪れたときも彼らは遊動的な狩猟採集の生活をやめ、FUNAIの指導で定着して農業や牛の牧畜を始めていたから、人口の上ではともかく、狩猟採集民としてはすでに消滅していたといえる。彼らはFUNAIが配布するアルミの鍋でカットマカロニを煮て食べ、若者のあいだではトランジスターラジオや自転車もてはやされていた。

その研究会出席者の一人から、ナンビクワラが、ラジオや鍋を手に入れられるようになったことを考えれば、彼らは開発の被害者だとばかりもいえないのではないかという発言があり、私は考えこんでしまった。私も含めて文化人類学者はとにかく、多様な伝統文化が、画一化された「近代的な」物質文明によって消滅することに対して批判的だ。確かに人類の文化遺産の多様さによって、未来への可能性を豊かに保つことが大切だ。しかし現に当事者が望んでいるのに、それを妨げる権利は部外者にはない。私はかねがね「発明は必要の母」という状況が今いたところに現出していると思っている。情報化の進展にともなって、欲望の地球化が生じている。そして一旦トランジスターラジオや自転車を知れば、今度はそれらをもたないことが、貧しく、不幸なこととして自覚されてくる。同様のことはアフリカ南部のブッシュマンが、ウマと鉄砲をとり入れて猟を効率化し、それが野生動物の過度の減少を招いている現状にも見ることができる。

実生活の経済水準の上昇がみられなくとも、道路の整備やトランジスターラジオや一部のテレビの普及によって情報化が地球規模で進み、欲望の地球化とともに人々の意識が著しく変化していることは、30年来接してきたアフリカでも強く感じさせられることだ。そのような意識の変化から、逆に政治・経済が住民自身の手で「伝統的」な生活圏をこえた広い視野からする判断で、改良されていくことに、部外者の私としては希望をつなぎたいと思う。